

# 日仏関係の礎を築いた人々



Portrait de HASEKURA Tsunenaga  
musée de la Ville de Sendai

支倉常長



SHIBUSAWA Eiichi  
(National Diet Library, Japan)

渋沢栄一



KURODA Seiki  
(National Diet Library, Japan)  
黒田清輝 (国立国会図書館)



Léonard Tsuguharu  
FOUJITA  
藤田嗣治



Emile GUIMET  
エミール・ギメ



Albert KAHN  
アルベール・カーン



Emile GALLÉ  
エミール・ガレ



Paul CLAUDEL  
ポール・クロードル

# — 目次 —

## — 日仏人物交流の始まり —

- 1 初めてフランスの地を踏んだ日本人・支倉常長 \_\_\_\_\_ 1

## — 日仏外交関係の樹立と日本の社会経済の近代化 —

- 2 日仏修好通商条約交渉のフランス側全権代表・グロ男爵 \_\_\_\_\_ 2
- 3 第二代駐日フランス全権公使・レオン・ロッシュ \_\_\_\_\_ 3
- 4 お雇い外国人（1）横須賀造船所・レオンス・ヴェルニー \_\_\_\_\_ 4
- 5 お雇い外国人（2）富岡製糸場・ポール・ブリュナ \_\_\_\_\_ 5
- 6 お雇い外国人（3）軍事顧問・アルベール＝シャルル・デュ＝ブスケ \_\_\_\_\_ 6
- 7 お雇い外国人（4）日本近代法の父・ギュスターブ・ボアソナード \_\_\_\_\_ 7
- 13 お雇い外国人（5）ラストサムライ：ジュール・ブリュネ \_\_\_\_\_ 8
- 24 お雇い外国人（6）日本初のガス灯設置：アンリ・ペルグラン \_\_\_\_\_ 9
- 26 お雇い外国人（7）生野銀山：ジャン＝フランシスク・コワニエ \_\_\_\_\_ 10
- 8 信徒発見・プチジャン神父 \_\_\_\_\_ 12
- 9 長崎の人々に捧げた生涯・ド・ロ神父 \_\_\_\_\_ 13
- 10 訪欧使節団・徳川昭武 \_\_\_\_\_ 14
- 11 日本近代経済の父・渋沢栄一 \_\_\_\_\_ 15
- 12 初代駐仏特命全権公使・鮫島尚信 \_\_\_\_\_ 16
- 15 最後の元老・西園寺公望 \_\_\_\_\_ 17
- 16 詩人大使：ポール・クローデル \_\_\_\_\_ 18
- 17 平民宰相：原敬 \_\_\_\_\_ 19
- 19 東洋のルソー：中江兆民 \_\_\_\_\_ 20
- 25 明治時代の産業発展に貢献：レオン・デュリー \_\_\_\_\_ 21

## — 学術・芸術交流の発展 —

- 32 ジャポニズムの立役者：林忠正 \_\_\_\_\_ 22
- 33 アジア美術コレクター・実業家：エミール・ギメ \_\_\_\_\_ 23
- 34 アジア美術コレクター・銀行家：アンリ・チェルヌスキ \_\_\_\_\_ 24
- 39 将来を見据えた篤志家の銀行家：アルベール・カーン \_\_\_\_\_ 25
- 18 日本研究の先駆者：レオン・ド・ロニー \_\_\_\_\_ 26
- 21 日本近代洋画の父：黒田清輝 \_\_\_\_\_ 27

22	洋画家：浅井忠	28
38	グラン=モランを描いた画家：佐伯祐三	29
23	日本画家：高島北海	30
36	ナンシー派とジャポニスム：エミール・ガレ	31
14	和歌に魅せられた作家：ジュディット・ゴージェ	32
20	風刺画家：ジョルジュ・ビゴー	34
27	明治の日本を描いた画家：フェリックス・レガメ	35
28	日本育ちのフランス人版画家：ポール・ジャクレ	36
29	広重四世：ノエル・ヌエット	37
30	ジャポニスム時代の日本人庭師：畑和助	38
31	日本の近代植物学の父：リュドヴィク・サバティエ	39
35	オーギュスト・ロダンと日本	40
37	エコール・ド・パリの寵児：藤田嗣治（レオナール・フジタ）	41
40	日本を愛したピアニスト：アルフレッド・コルトー	42

「日仏関係の礎を築いた人々」は、在フランス日本国大使館が毎月発行しているフランス語のニュースレターLes Nouvelles du Japonに掲載した文化コラム「日仏交流人物シリーズ」の日本語原文です。

アーカイブ：[日仏交流人物シリーズ](#)



## 1 初めてフランスの地を踏んだ日本人・支倉常長

現在、フランスには約4万人<sup>1</sup>の日本人が生活しています。2019年にフランスから日本に入国した人の数は、約336,000人<sup>2</sup>にのぼります。また、例年であれば、年間50万人以上の日本人<sup>3</sup>がフランスを訪れます。では、最初にフランスの地を踏んだ日本人は誰だったのでしょか。

1613年、支倉常長は東北地方を治めていた仙台藩主の伊達政宗の命で、スペイン国王とローマ教皇に謁見するために、ヨーロッパへ派遣されました。その目的は、スペイン領メキシコとの交易と日本への宣教師の派遣を実現することでした。1615年、スペイン滞在の後にローマへ向かう途中、木造船で航海を続けていた常長の一行は、悪天候のためにサン・トロペに寄港して数日間滞在しました。このことから、常長の一行がフランスの地に足を踏み入れた最初の日本人であるとされています。



支倉常長像/ 仙台市博物館所蔵

フランス国内の図書館には、常長らの様子を伝える手記が残されています。そこには、彼らが二本の小さな棒（箸）を使って食事をしたことや、鼻をかむ時には紙を使い、その紙が使い捨てだったことが記録されているそうです。初めて見る日本人の行動に、当時のフランス人はさぞかし驚いたことでしょう。

常長の一行は、日本を出発してから7年後の1620年に帰国しました。スペインやローマでの交渉は実らなただけでなく、すでに日本国内ではキリスト教の弾圧が行われていました。その後、日本は鎖国の時代に入りました。日本とフランスの交流が始まるまで、200年以上の時を待たなければなりませんでした。

掲載日：2021年1月21日

---

<sup>1</sup> 令和元年10月1日現在のフランスの在留邦人数は40,538人。出典：令和2年度海外在留邦人数統計

<sup>2</sup> 2019年のフランスからの入国者は336,400人。出典：日本政府観光局（JNTO）

<sup>3</sup> 2018年にフランスに入国した日本人は540,169人。出典：日本政府観光局（JNTO）

## 2 日仏修好通商条約交渉のフランス側全権代表・グロ男爵

18世紀後半になると、鎖国を続ける江戸幕府に対して、欧米諸国が開国を求めて接近しました。1854年に日米和親条約が締結されたことで、日本の鎖国体制に終止符が打たれました。1858年には、アメリカ、オランダ、ロシア、イギリスに続いて、フランスとの間でも修好通商条約を締結しました。この条約の締結によって、日本とフランスの正式な友好関係が始まり、締結から160年後の2018年に、フランスで大規模な文化芸術イベント「ジャポニスム2018」が開催されました。

日仏修好通商条約の交渉のフランス側の全権代表を務めたのが、ジャン・バティスト・ルイ・グロ男爵(1793-1870)です。外交官だったグロ男爵は、条約交渉のために1858年来日しました。日仏条約は、既に他国と締結した条約を土台として交渉が行われました。有利浩一郎在フランス日本国大使館参事官(当時)の調査<sup>1</sup>によると、グロ男爵は、ワインの関税率は、日米条約や日英条約で規定された35%では事実上の輸入禁止を意味するので、日仏条約では20%とするよう主張しました。そして、フランスは、アメリカ、イギリスやロシアとは異なり、良質なワインを生産して他国に提供しており、関税率を下げなければ日本人がフランス産の美味しい赤ワインやシャンパンを飲むことができなくなると説明して、日本側を説得しようと試みました。しかし、日本側はグロ男爵の主張を受け入れず、フランスワインを輸入する必要があるれば5年後に関税率の見直しをすればよい、日本にも美味しい「ワイン」(酒)があるので満たされている、と回答しました。



Jean-Baptiste Louis GROS  
(フランス国立図書館)

グロ男爵の主張から約160年の時を経た2019年2月に、日EU経済連携協定(EPA)の発効とともに、フランスを含むEUから日本に輸入されるワインの関税が即時撤廃されました。そして、同時に、日本からEUに輸入される日本酒の関税も即時撤廃されています。



グロ男爵の墓

グロ男爵は、今、サンジェルマン・アン・レイの旧墓地にて静かに眠っています。

掲載日：2021年2月12日

<sup>1</sup> 有利浩一郎著 「日仏修好通商条約、その内容とフランス側文献から見た交渉経過(2)～日仏外交・通商交渉の草創期～」 財務省広報誌「ファイナンス」平成30年7月号

### 3 第二代駐日フランス全権公使・レオン・ロッシュ

1864年、第二代駐日フランス全権公使となったのは、レオン・ロッシュ（1809-1900）でした。日本が開国してまもない頃で、上質な生糸を求めてフランスの商人が横浜に集まり始めていました。グルノーブル出身のロッシュは、グルノーブル大学に入学しましたが、半年で中退しました。アルジェリアで農園を経営していた父親に呼ばれてアルジェリアへ渡り、アラビア語を身に着けました。そして、フランス軍アフリカ部隊の通訳官となり、アルジェリア側の指導者アブド・アルカーディルとの交渉を担ったことが、外交の道へ進むきっかけとなりました。軍を離れた後にモロッコのタンジェ領事館員として赴任し、トリポリ（リビア）やチュニス（チュニジア）の総領事を歴任した後に、日本に着任しました。



Michel Jules Marie Léon ROCHES  
(フランス国立図書館)

アラビア語の専門家であったロッシュが日本に派遣されたのは、イギリスに先を越されていた通商政策を推進するためであったと考えられています。密かに反幕府勢力に協力していたイギリスに対抗するために、フランスは江戸幕府に接近しました。ロッシュは、幕府からの依頼で、横須賀造船所を建設するためにフランスから技術者を招き、フランス語を解するエリート士官を養成するための横浜仏語伝習所の開設に尽力しました。フランスから軍事顧問団の派遣も実現させました。

1867年、徳川慶喜が大政奉還をして、ロッシュが支援した江戸幕府の時代は終わりました。しかし、ロッシュによって日本にもたらされた技術や知識は、明治時代の日本の近代化に大きく貢献することになりました。

掲載日：2021年3月12日

#### 4 お雇い外国人（1）横須賀造船所・レオンス・ヴェルニー

1858年にアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと相次いで修好通商条約を締結した江戸幕府は、「お雇い外国人」と呼ばれた欧米の技術者や専門家の助けを得て、近代化を進めていきました。その一人であるフランソワ・レオンス・ヴェルニー（1837-1908）は、エコール・ポリテクニク（理工科大学校）を卒業後、海軍造船工学校で造船工学や造船技術を学び、海軍の技術者となりました。欧米列強の巨大な鋼鉄船を目の当たりにして海軍力の増強の必要性を認識した幕府は、レオン・ロッシュ第二代駐日フランス全権公使の勧めにより、フランスから技術者を招いて造船所を建設することにしました。そこで指導者として白羽の矢が立ったのが、中国の寧波で造船所やドックの建設を指揮していたヴェルニーでした。



François Léonce VERNY  
(フランス国立図書館)

ヴェルニーの指導により、1865年から横須賀製鉄所（後に横須賀造船所に名称変更）の建設が始まりました。横須賀は、東京湾の入口にあり、水深が深く造船所の建設に向いているとの理由から建設地に選ばれました。当時は小さな田舎の村に過ぎなかった横須賀には、フランスから招かれた造船や製鉄の技術者、職人、医師などが暮らすことになりました。造船に必要な施設、ドックや軍艦の建設が進められ、横須賀造船所は日本で最初の近代的な総合工場となりました。日本で最初の灯台も、ここで作られました。熱した鉄をたたいて形を整えるスチームハンマーはその後100年以上も現役で使用されました。日本の重要文化財に指定され、現在は横須賀にあるヴェルニー記念館に展示されています。人材育成にも力を入れたヴェルニーは造船所内に学校を設け、ここでフランス語や造船技術を学んだ若者が幅広い分野で活躍しました。横須賀は、国防の重要な拠点として発展し、現在は在日米軍と海上自衛隊の基地があります。

ヴェルニーは、日本に来る前にブレストにある海軍工廠に勤務していました。このことがきっかけで横須賀市とブレスト市は姉妹都市となり、2020年に姉妹都市提携50周年を迎えました。

掲載日：2021年4月20日

## 5 お雇い外国人（2）富岡製糸場・ポール・ブリュナ

日本では古代から養蚕が行われていましたが、質の良い絹を生産することができなかつたため、中国からの輸入に頼っていました。そこで、江戸（1603 - 1867）幕府は養蚕と絹織物の生産に力を入れ、全国各地で良質な生糸が生産されるようになり、生糸は 1860 年頃の開国直後の日本の主要な輸出品になりました。



Paul BRUNAT

一方、ヨーロッパでは 19 世紀後半に蚕の伝染病が発生し、フランスの養蚕業は大打撃を受けました。横浜にいたフランスの商人から、日本の蚕が病気に強く、上質な生糸が生産されているとの情報がもたらされたことから、ヨーロッパへの日本の生糸の輸出が急増しました。しかし、過大な需要によって粗悪な生糸が流通したために、日本の生糸の評価が下がってしまいました。そこで、明治（1868-1912）政府は、質の高い生糸を輸出するために、官営の製糸工場を建設することにしました。この時、横浜で生糸の検査人をしていたポール・ブリュナ（1840-1908）が、外国人顧問として迎えられました。

ブリュナと明治政府の役人による調査の結果、養蚕業が盛んであること、水や燃料となる石炭が豊富にあるといった理由から、現在の群馬県富岡市に工場が建設されることになりました。そして、1872 年に日本で最初の西洋式の製糸工場である富岡製糸場が完成しました。ブリュナは、製糸場に必要な技術者をフランスから招き、日本人の体格に合うように改良した機器を取り寄せました。繰糸所（繭から糸を取り出す作業をするための建物）では、全国から集まった工女が働き、本格的な器械による製糸が行われました。ここで生産された生糸は質が高いため、海外で高く評価されました。

2014 年、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が、世界遺産に登録されました。2015 年には、富岡市とブリュナが生まれたブル・ド・ページュ (Bourg-de-Péage) 市が姉妹都市となり、新たな交流が生まれました。

掲載日：2021 年 5 月 20 日

## 6 お雇い外国人（3）軍事顧問・アルベール＝シャルル・デュ＝ブスケ

19世紀後半に開国して近代化を急ぐ江戸幕府は、軍隊を創設しました。幕府の役人がイギリスとフランスを訪問して幕府陸軍に対する軍事訓練を依頼し、ナポレオン三世が日本に軍事顧問団を派遣することを承諾しました。1867年にアルベール＝シャルル・デュ＝ブスケ(1837-1882)を含む第一次軍事顧問団の一行計15名(後に4名追加)が、横浜に到着しました。



Albert Charles DU BOUSQUET  
(写真：林邦宏)

軍事顧問団は、幕府のエリート部隊に対して軍事訓練を行いました。ただし、エリート部隊とは言っても、武士だけでなく荷物の運搬人や火消(消防士)など様々な職業の人から成る混成部隊でした。訓練は成果を上げたものの、江戸幕府の時代は終わり、1868年に誕生した明治政府によって軍事顧問団は解散を命じられました。中には帰国せずに、戊辰戦争の最後の戦いであった箱館戦争で、旧幕府軍を支援した者もいました。デュ・ブスケは、箱館戦争には参加しませんでした。旧幕府軍に政治や軍事に関する情報を提供しました。

軍事顧問団の解散後、デュ・ブスケはフランス公使館の通訳官となり、1870年にお雇い外国人として、兵部省(現在の防衛省に該当)の軍事顧問に採用されました。富岡製糸場の建設の技術指導者として、明治政府にポール・ブリュナを推薦しました。デュ・ブスケは、苗字のDU BOUSQUETを日本語の発音にして「治部輔(Jibusuke)」と名乗っていたことから、デュ・ブスケがデザインした軍服は「ジブスケ袴」と呼ばれました。

デュ・ブスケは日本人女性と結婚し、明治政府との契約終了後もフランスの領事として働き、日本で生涯を終えました。名字のDU BOUSQUETがフランス語で小さな林を意味する「Bosquet」の発音が似ていることから、彼の息子が帰化したときに苗字を「林」としました。

現在、横浜港を見下ろす高台には、港の見える丘公園があります。この公園の北側の小高い丘は、「フランス山」と呼ばれています。そこには、かつてフランス軍事顧問団が駐屯し、その後はフランス領事館が置かれていました。

掲載日：2021年6月15日

## 7 お雇い外国人（4）日本近代法の父・ギュスターブ・ボアソナード

明治政府の最優先課題であった不平等条約の改正を果たすには、近代的な法典の整備が急務でした。明治政府は、当時のヨーロッパで評価が高かったフランス法を翻訳して民法を起草しようとしたが、自分たちの力では困難でした。そこで、お雇い外国人として招かれたのが、ギュスターブ・エミール・ボアソナード・ド・フォンタラビー（1825-1910）です。



Gustave Émile BOISSONADE  
DE FONTARABIE

パリ大学で教鞭をとっていたボアソナードは、1873 年に来日しました。司法省法学校<sup>1</sup>や私立の法律学校で教壇に立ち、多くの優秀な法学者を育てました。また、旧刑法、治罪法（現在の刑事訴訟法）、旧民法を起草しました。

旧刑法と治罪法は施行されたのに対し、旧民法は、政府内で施行すべきか大論争が起こり、結局施行されませんでした。しかし、ボアソナードが起草した旧民法は、日本の民法の基礎作りに大きな貢献をしました。さらに、不平等条約の改正では、当時の井上馨外相が、外国人司法官を任用する代わりに外国人も日本法に従うとする改正案を示したのに対し、ボアソナードは、司法権を外国人に委任するのは不当であると反対意見を述べました。これによって井上の案に対する反対運動が起こり、井上の案は採用されませんでした。

ボアソナードは、明治時代の日本の司法に多大な貢献をしたことから、「日本近代法の父」と言われています。1876 年、日本政府による初めての外国人叙勲として、勲二等旭日重光章に叙されました。

1934 年、在仏日本人が、パリ第一パンテオン・ソルボンヌ大学にボアソナードの胸像を建てました。同じ型の胸像が、東京（ボアソナードが教鞭をとった東京法学校を前身とする法政大学と最高裁判所の二か所）にもあります。

掲載日：2021 年 8 月 5 日

---

<sup>1</sup> 司法省が所管したフランス法を専門とする司法官を養成するための教育機関

### 13 お雇い外国人（5）ラストサムライ：ジュール・ブリュネ

以前にご紹介したアルベール・シャルル・デュ・ブスケ (<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100479005.pdf>) とともに 1867 年に第一次軍事顧問団として来日した軍事顧問の一人に、ジュール・ブリュネ (1838-1911) がいます。ブリュネは、エコール・ポリテクニク（理工科大学校）で学んだ後に、士官学校と砲兵学校を卒業して陸軍に入りました。ブリュネは、シャルル・シャノーヌを隊長とする軍事顧問団の副隊長として来日しました。



Jules BRUNET

1868 年に誕生した明治政府によって軍事顧問団が解散を命じられた際に、ブリュネはフランス軍籍を離脱して日本に残り、戊辰戦争の最後の戦いであった箱館戦争で旧幕府軍を支援しました。しかし、旧幕府軍は敗北し、ブリュネはフランスへ送還されました。1870 年に勃発した普仏戦争で軍への復帰が認められ、将官となって軍人としてのキャリアを終えました。ブリュネはスケッチの才能もあり、当時の幕府軍の姿を多くのスケッチに残しました。

2003 年に公開されたハリウッド映画「ラストサムライ」で、トム・クルーズが演じたネイサン・オールグレンのモデルとなったのが、ジュール・ブリュネだと言われています。

参考：フランス国防省ウェブサイト「本当の《ラストサムライ》を知っていますか？」（仏語のみ）

<https://www.defense.gouv.fr/actualites/articles/le-saviez-vous-jules-brunet-le-vrai-dernier-samourai>

なお、箱館戦争の舞台となった五稜郭は、フランス北部のリールに残る要塞と同じく星形要塞で、当時の箱館奉行所の役人がフランス軍から学んで設計されたものです。

掲載日：2022 年 3 月 1 日

## 24 お雇い外国人（6）日本初のガス灯設置：アンリ・ペルグラン

開国直後の1860年代、江戸幕府は国の近代化政策のためにヨーロッパに使節団を派遣しました。使節団のメンバーは、ガス灯によって明るく照らされる夜のヨーロッパの町の美しさに魅せられると同時に驚きを覚えまして。そして使節団の提案によって、日本にガス灯を導入する計画が動き始めました。



Henri Auguste PELEGRIN  
アンリ・ペルグラン

最初に、外国人居留地があった横浜でガス灯の設置が進められることになりました。1870年に明治政府と横浜市は、照明用ガス工場の建設と稼働に向けた競争入札を行い、日本で最初のガス工場建設会社を設立した高島嘉右衛門が落札しました。高島は、この分野の有能な技師を探し、アンリ・ペルグラン(Henri Auguste PELEGRIN) (1841-1882) と出会いました。ペルグランは、当時上海のフランス租界にガス灯を設置する任務に当たっていました。1870年に来日し、外国人居留地を含めた横浜の町全体の照明計画の準備を進めました。翌年には、明治政府から東京の照明計画の検討も依頼されました。そして、1871年から2年契約で、明治政府からお雇い外国人として正式に任命されました。必要な資材や装置を買い付けるために一度ヨーロッパへ戻り、日本に帰国して10か月後の1872年7月から、横浜でガス管を敷設する工事が始まりました。

1872年9月29日、10基のガス灯が初めて横浜の夜の町を照らしました。そしてその年の年末までには、300基以上のガス灯が設置されました。1875年に明治天皇がガス灯を視察するために、東京から横浜を訪れました。1874年に東京にガス灯が登場するまでは、東京から横浜まで汽車に乗って、横浜のイルミネーション見学をするのが、当時のトレンドの行楽コースとなりました。

ペルグランは、東京のガス灯の敷設にも尽力し、通算9年間の滞在を終えて1879年に日本を後にしました。その後、スペインのマラガ・ガス会社の経営に当たりました。そして、その3年後、製糖所建設のために滞在していたハイチで、41歳の若さで他界しました。

東京で初めてガス灯が設置された銀座には、現在でも「銀座ガス灯通り」と呼ばれる通りがあります。日本でペルグランの名を知る人はあまりなく、ガス灯はもうありません。しかし、ペルグランが日本にもたらした灯は、新たな時代を切り開こうとしていた当時の日本人に多くの希望を与え、形を変えて現在でも輝き続けています。

掲載日：2023年3月1日

## 26 お雇い外国人（7）生野銀山：ジャン＝フランシスク・コワニエ

ジャン＝フランシスク・コワニエは、サンテチェンヌの鉱山学校を卒業した後、フランス政府による調査隊に加わってマダガスカルやメキシコを探検し、ゴールドラッシュに沸くカリフォルニア州など世界各地の鉱山を視察し、1867年から鉱業資源調査のために薩摩藩によって招聘されていました。明治政府は、江戸幕府から受け継いだ産業資産の一つである但馬国の生野鉱山の鉱山経営を近代化するため、おそらく第一号のお雇い外国人としてコワニエを雇い入れました。



Jean Francisque  
COIGNET  
ジャン＝フランシスク  
コワニエ

コワニエは、鉱山技師として生野銀山に赴任しました。そこでは、当時の欧米の先進技術を伝えるために鉱山学校を開校し、技術者の育成に務めました。ここで学んだ生徒の一人には、日本画家で地質学の研究もした[高島北海](#)がいました。

生野銀山は、1542年に地元の役人によって銀石が掘り出されたことが始まりとされています。生野は銀のみならず銅や錫も産出し、江戸時代には、幕府の天領となり、佐渡金山、石見銀山とともに幕府の財政を支えました。しかし、コワニエが目にした生野銀山は、廃墟に近い状態だったと言います。人力のみに頼っていた採掘作業に火薬発破を導入し、運搬作業の機械化を推進し、軌道の敷設や巻き揚げ機の設置をして、作業を効率化させました。コワニエは、フランスから地質家、鉱山技師、坑夫、医師らを招き、総勢20数名のフランス人が生野銀山の仕事に従事するようになりました。家族も入れると、50名近いフランス人が生野で生活していたと考えられています。コワニエの指導によって、生野銀山は、近代的な採掘方法を取り入れた鉱山になりました。

コワニエは、日本滞在中に各地の鉱山調査も行い、1874年に「日本鉱物資源に関する覚書」を著しました。

生野銀山は、1973年に閉山し、現在は史跡として一般公開されています。1889年から7年間、生野銀山は皇室財産となり、当時の宮内省が所管した時代がありました。現在でも、菊花御紋が入った門柱が残されています。この門柱は、当時の工場正門のために作られたもので、菊花御紋入りの門柱はとても珍しいものです。

生野銀山がある兵庫県朝来市は、フランスのセーヌ＝エ＝マルヌ県のバルビゾンと姉妹都市提携を結んで、芸術を通じた交流をしています。鉱山から芸術へ

26 お雇い外国人（7）生野銀山：ジャン＝フランシスク・コワニエ

と形は変わりましたが、生野とフランスとの交流は続いています。



掲載日：2023年5月2日

## 8 信徒発見・プチジャン神父

1858年に日仏修好通商条約が締結されてから、両国の間で様々な文化交流が生まれました。日本に渡ったフランス人の一人であるベルナール・プチジャン（1829-1884）は、パリ外国宣教会の宣教師として1862年に横浜に上陸し、1864年に長崎に赴きました。1858年に締結された日仏修好通商条約によって、長崎の外国人居留地に住むフランス人のための教会建築が許可され、1865年に大浦天主堂が完成しました。



Bernard-Thadée PETITJEAN  
(フランス国立図書館)

大浦天主堂は、当時では珍しい洋風建築であったことから評判となり、近所の住民からは「フランス寺」や「南蛮寺」と呼ばれて見学に来る住民がいました。プチジャン神父は、日本人にも教会を開放し、自由に見学できるようにしました。なぜなら、プチジャン神父は、16世紀末からキリスト教弾圧が続いた日本でも、密かに信仰を持ち続けている人がいるのではないかという期待を持っていたからです。

1865年のある日、大浦天主堂を訪れた数名の女性が、「私たちもあなたと同じ信仰を持っています。聖マリア像はどこにありますか。」と神父に尋ねました。天主堂に姿を見せたのは、キリスト教が弾圧されていた江戸時代に密かにキリスト教の信仰を守り続けていた「隠れキリシタン」でした。プチジャン神父による「信徒発見」はヨーロッパに伝えられ、大きなニュースとなりました。その後、キリシタンだと名乗る者が次々と現れました。弾圧を逃れるために、仏教のお経のような祈りを唱え、仏像のような聖マリア像に手を合わせ、神道のような儀式を行っていた隠れキリシタンに対して、プチジャン神父はカトリック信仰を教えました。

プチジャン神父は、人生の後半を日本人のために捧げ、1884年に長崎で生涯を終えました。大浦天主堂は1953年に日本の国宝に指定され、この天主堂を含む「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、2018年にユネスコ世界文化遺産に登録されました。

掲載日：2021年10月1日

## 9 長崎の人々に捧げた生涯・ド・ロ神父

貴族の家に生まれたマルク・マリー・ド・ロ（1840-1914）は、開国後の明治時代に日本で生活した外国人の一人で、1868年にパリ外国宣教会の神父として来日し、1878年に長崎の中心部から約30kmほど離れた外海（そとめ）地区にある出津（しつ）教会に赴きました。



Marc Marie DE ROTZ

外海地区には、キリスト教の信者が多く暮らしていました<sup>1</sup>。この地域はとても貧しく、孤児や捨て子、海難事故や病気で働き手を失った女性が多くいることにド・ロ神父は心を痛めました。そこで、私財を投じて、孤児院や救助院を設立しました。救助院とは女性のための授産施設で、ド・ロ神父の技術指導によって、織物、素麺、マカロニやパン等を製造し、長崎の中心部に暮らすヨーロッパ人に販売して収入を得ました。ド・ロ神父は、フランスで身につけた農業、印刷、医療、土木、建築、工業、養蚕業など様々な技術を惜しみなく伝えました。地元の人々から「ド・ロさま」と呼ばれて親しまれ、外海の人々に生涯を捧げました。

ド・ロ神父が伝えた製麺技術は、一度は廃れたものの2008年に復活し、現在は「ド・ロさまそうめん」として販売されています。外海地区の出津集落は、2018年にユネスコ世界遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の一つに指定されています。また、外海のキリシタン弾圧を題材にしたのが、遠藤周作による小説「沈黙」（仏語タイトルは” Silence”）です。この作品は、1971年に篠田正浩監督によって、また2016年にはマーティン・スコセッシ監督によって映画化されました。

1978年、旧外海町とノルマンディーにあるド・ロ神父の出身地であるヴォー・シュール・オール市（Vaux-sur-Aure）は、姉妹都市提携をしました。2005年に旧外海町は長崎市に組み込まれたことから、現在は45万人近い人口を擁する長崎市とわずか350人余りの人が暮らすヴォー＝シュール＝オール市が姉妹都市となっています。

掲載日：2021年10月29日

---

<sup>1</sup> キリスト教が弾圧されていた江戸時代に密かに信仰を守っていた「隠れキリシタン」の多くは、1865年のプチジャン神父による「信徒発見」以降にカトリックに復帰したと言われているが、中にはカトリックとは異なる「隠れキリシタン」独自の信仰を維持した者もいた。

## 10 訪欧使節団・徳川昭武

19世紀半ばに欧米諸国と本格的な交流を始め近代化を進めた日本は、1867年に開催されたパリ万国博覧会に初めて参加しました。浮世絵、油彩画、漆器、陶器など多数の美術工芸品が出品され、後のジャポニズムのブームのきっかけとなりました。この時、派遣された使節団の代表を務めたのが、江戸幕府の最後の将軍であった徳川慶喜(1837-1913)の名代として選ばれた徳川昭武(1853-1910)でした。昭武は、慶喜の異母弟で弱冠14歳の青年でした。使節団の一行は、パリで万博を視察したほか、ナポレオン三世に謁見しました。



徳川昭武（国立国会図書館）

昭武は、万博終了後にオランダ、ベルギー、イタリア、イギリスなどヨーロッパ各国を歴訪し、その後パリで留學生活を送りました。留學中の昭武は、一流の教師達からフランス語、馬術、文学、歴史、地理や科学を学びました。また、画家のジャック・ジョセフ・ティソ（通称ジェームス・ティソ）(1836-1902)から、絵画の指導も受けました。

慶喜が昭武をパリに留學させたのは、慶喜が昭武を自分の後継者として期待していたからであると言われてています。しかし、1867年に慶喜が大政奉還をして徳川幕府の時代は終わり、1868年に明治政府から帰国命令が出されたため、一行は帰国することになりました。帰国後、昭武は水戸藩主（後の水戸藩知事、水戸藩は現在の茨城県）になりました。昭武がその後の政治の中心的な役割を果たすことはありませんでしたが、昭武がヨーロッパから持ち帰った知識や経験は、日本の新しい国造りに大きな役割を果たしました。

掲載日：2021年12月1日

## 11 日本近代経済の父・渋沢栄一

1867年に開催されたパリ万国博覧会に参加するために派遣された欧州使節団の随員の一人に、渋沢栄一（1840-1931）がいます。渋沢は、パリ万国博覧会に参加した後、ヨーロッパ各国を歴訪した徳川昭武<sup>1</sup>に随行し、ヨーロッパの目覚ましい産業の発展や軍事力を目の当たりにしました。昭武のフランス留学に伴って一年余りをフランスで過ごし、近代国家の在り方を実際に目にしたことが、当時の日本が抱えていた多くの問題に取り組む原動力となったとされています。



渋沢栄一（国立国会図書館）

帰国後、渋沢はフランスで学んだ株式会社の仕組みを参考にして、明治政府からの貸付金を元本として商社と銀行を合わせたような組織（商法会所）を設立しました。その後、当時の大蔵大輔（現在の財務次官）であった大隈重信からの要請で、1869年に大蔵省の官僚になり、富岡製糸場の設立に向けた調整を担いました。また、1872年に国立銀行<sup>2</sup>の設立を可能にする国立銀行条例の制定にも尽力しました。1873年に大蔵省を退官した後に、日本初の銀行で最初の株式会社でもあった第一国立銀行を設立しました。この他、鉄道会社、製紙会社、ガス会社、電力会社、セメント会社、ホテル、保険会社、ビール製造会社など幅広い分野の会社や証券取引所の設立に関与し、その数は500を超えられています。このことから渋沢は、「日本近代経済の父」又は「日本資本主義の父」と言われています。

また、渋沢は学校や病院の設立を通して社会事業にも熱心に取り組み、関与した施設の数も600にも及ぶとされています。1924年には、当時の駐日フランス大使で詩人でもあったポール・クローデルとともに、日仏文化と学術の交流を図ることを目的として日仏会館を設立しました。

2024年に日本の紙幣の変更が予定されており、新一万円札の図柄には渋沢の肖像が採用されました。

掲載日：2022年1月4日

---

<sup>1</sup> 江戸幕府最後の将軍であった徳川慶喜の異母弟

<sup>2</sup> アメリカのナショナル・バンク（国法銀行）をモデルとした民間出資による銀行で、1882年に中央銀行である日本銀行が設立されるまで、紙幣の発行を担った。

## 12 初代駐仏特命全権公使・鮫島尚信

鮫島尚信（1844-1880）は、薩摩藩（現在の鹿児島県）の藩医の子として生まれました。長崎で医学と英語を学んだ鮫島は、1865年、薩摩藩遣英視察団に参加した留学生15名の一人として、ロンドン大学に一年間留学しました。その後アメリカで学び、1868年に帰国して明治政府に勤務しました。鮫島は、英国、フランス、プロシアの三か国に対する外交代表（当時の名称は弁務士）に任命され、1872年にパリに着任し、在任中に特命全権公使に昇任しました。鮫島は、日本人で初めてフランスに常駐した外交官です。



鮫島尚信（在仏日本国大使館）

1874年に帰国し、翌年には外務大輔（現在の外務次官）になり、1878年に再び特命全権公使としてパリに赴任しました。鮫島に課された重大な任務は、不平等条約の改正交渉を行うことでした。しかし、在任中の1880年に病に倒れ、36歳の若さでこの世を去りました。

日本の司法の近代化に貢献したポアソナードは、1873年に鮫島からの依頼で日本人留学生に法律学を教えたことが縁となって、同年にお雇い外国人として日本に赴きました。

鮫島は、公使館が雇っていたイギリス人弁護士のフレデリック・マーシャルとともに、「Diplomatic Guide」（外交文法案内）を作成しました。これは、後進の日本人外交官のために外交の基礎知識をまとめた本で、公使館の権利、任命手続、外交特権、信任状のひな型、国際法、領事の職務等について記載されています。

短いながらも激動の外交官人生を送った鮫島は、パリのモンパルナス墓地で静かに眠っています。

掲載日：2022年2月1日

## 15 最後の元老；西園寺公望

京都に生まれた西園寺公望（1849-1940）は、戊辰戦争に従軍しました。軍人を目指していた西園寺は、明治政府の命令で1871（明治4）年から1880（明治13）年まで約10年間にわたってフランスに留学しました。留学中は、法学者エミール・アコラス（1826-1891）の私塾やパリ大学法学部で法律を学びました。



SAIONJI Kinmochi  
(National Diet Library, Japan)  
西園寺公望（国立国会図書館）

帰国後は政治家の道に進み、1906（明治39）年に内閣総理大臣に就任しました。19世紀末から第二次世界大戦前まで、元老という天皇を補佐する重臣が存在しました。西園寺は、9名いた元老の一人で、彼の死と共に元老の制度も消滅したことから、西園寺は最後の元老と言われています。

西園寺は、アコラスの私塾で、ジョルジュ・クレマンソーと知り合いました。クレマンソーが数千点もの日本の美術品をコレクションした背景は、西園寺の影響もあったとも考えられています。1919（大正8）年にパリ講和会議の全権を務めた西園寺は、クレマンソー首相と再会しました。そして、二人とも二度首相を務めました。

西園寺の回想録「陶庵随筆」の中で、1870年代にパリ・オペラ座前の通り（rue de la Paix）の店に醤油が売られていたことが書かれています。90歳という長寿を全うした西園寺は、最晩年には日本料理にフランスパンを合わせて食べていたというエピソードが残されています。

掲載日：2022年4月29日

## 16 詩人大使：ポール・クローデル

ポール・クローデル（1868-1955）は、彫刻家の姉カミーユの影響で、早くから日本に関心を持ちました。日本に行くための近道として、外交官の道を選んだとも言われています。



Paul CLAUDEL  
ポール・クローデル

クローデルは、1921（大正10）年から1927（昭和2）年までの間、フランスに帰国していた1年間を除いて、約4年間にわたって駐日大使を務めました。日本滞在中は、外交官としての仕事を続けながら、執筆活動も続けたことから、当時の新聞は彼のことを「詩人大使」と呼びました。

クローデルを研究している日本人学者によると、クローデルは「共同出生 (co-naissance)」という独自の理論を持っていたと言います。「永続的な関係を結ぶには、相互の利益に基づく関係でなければならない」というのが、彼のモットーでした。

クローデルが本国から与えられたミッションには、武器や航空機を始めとするフランス製品を日本に売り込むことや、日本におけるフランス語の普及がありました。クローデルは、「共同出生」の考えに基づいて、フランス語を教育するだけでなく、日仏の研究者の交流の場を創設したいと考えました。この考えに賛同した実業家の渋沢栄一（<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100282937.pdf>）は経済的支援を惜しまず、1924（大正13）年に東京に日仏会館が開館しました。また、京都には1927（昭和2）年に実業家の稲畑勝太郎の協力により、関西日仏学館（現在のアンスティチュ・フランセ関西とヴィラ九条山の前身）が設立されました。

日仏両国の間で相手国の文化に関する優れた研究成果に対して贈られる「渋沢・クローデル賞」という学術賞があります。相互理解を深めることを大切にしていたクローデルの名前に相応しい賞と言えるでしょう。

掲載日：2022年6月3日

## 17 平民宰相：原敬

原敬（1856–1921）は、現在の岩手県盛岡市に生まれました。幼くして父親を亡くし、15歳で上京しました。経済的に苦勞し、1872（明治5）年にフランス人神父が運営するカトリック神学校で学び始めました。原がこの学校で学んだ理由は学費がかからなかったことですが、ここで洗礼を受け、ダビデという洗礼名を与えられました。原は、神父が行っていた宣教活動に同行したこともあり、神父から学んだフランス語力を活かして新聞記者となり、その後外務省に引き抜かれて、1885年にパリの日本公使館に赴任しました。



HARA Takashi  
(National Diet Library, Japan)  
原敬（国立国会図書館）

原は、1889（明治22）年にパリ勤務を終えて帰国し、外務次官になった後に退官しました。新聞社経営に携わり、政界に進出しました。そして、1918（大正7）年に内閣総理大臣になりました。原内閣は、日本で最初の本格的な政党内閣でした。第二次世界大戦前の日本には貴族制度があり、華族の爵位を拝受できる立場にありましたが、原はこれを固辞し続けたことから、原は「平民宰相」と呼ばれました。

原が内閣の要職にあった第一次世界大戦の時代は、軍需工業品の生産のために国民を動員する必要があり、そのために人口調査が必要でした。フランスから人口調査の重要性を学んだ原は、総理大臣になって内閣に国勢院を設置し、第一次世界大戦後の1920年（大正9年）に全国を対象とした第一回国勢調査を実施しました。そして、統計の更なる発展を目指して、内閣に中央統計委員会を設置しました。

フランスで勤務経験を持つ原敬は内閣の中心人物として、日本の近代国家への歩みに貢献しました。

掲載日：2022年7月6日

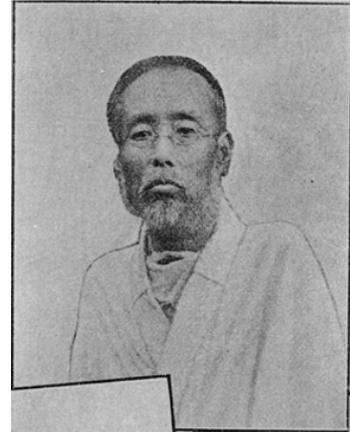
## 19 東洋のルソー：中江兆民

現在の高知県に生まれた中江兆民(1847-1901)は、長崎や江戸でフランス語を学び、1871(明治4)年にフランスへ向けて出発しました。1871(明治5)年から1874(明治7)年までリヨンとパリに滞在し、法律学、歴史学や哲学を学ぶ傍らでヴォルテール、モンテスキュー、ジャン=ジャック・ルソーの著作に親しんで、自由民権思想の基礎を築きました。

帰国後は、東京で仏学塾を開いて、フランスから持ち帰った思想を広めました。自由民権運動の気運が盛り上がる中、1881(明治14)に西園寺公望

(<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100479014.pdf>)と共に「東洋自由新聞」を創刊しました(1か月余りで休刊)。翌1882年には、仏学塾からジャン=ジャック・ルソーの「社会契約論」(Du Contrat Social ou Principes du droit politique)の漢文訳である「民約訳解」を刊行しました。この本が民衆に広まると、自由民権運動がさらに活発になりました。これは、明治時代の日本で、憲法の制定と国会開設を目指した政治社会運動でした。兆民は、ルソーの思想を日本に紹介したことから、「東洋のルソー」と言われています。

兆民は、「自由は取るべき物なり。貰うべき品にあらず。」という言葉を残しました。兆民の思想は、一部の政治家に独占されていた明治政府と対立したことがありました。しかし、1889(明治22)年に大日本帝国憲法が公布(1890年施行)され、翌1890(明治23)年には第一回衆議院議員選挙が行われて兆民も当選しました。帝国議会が開催された日本の社会は、大きく変革しました。

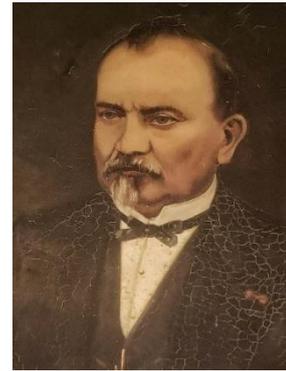


NAKAE Chomin  
(National Diet Library, Japan)  
中江兆民(国立国会図書館)

掲載日:2022年10月5日

## 25 明治時代の産業発展に貢献：レオン・デュリー

レオン・デュリー（1822-1891）は、1862年に日本に到着しました。江戸幕府が箱館に建設する予定だった病院の病院長として招へいされましたが、病院の設置計画が中止となっていたため、デュリーは、長崎のフランス領事館に勤務となり、領事として勤務する傍らで日本人にフランス語を教えました。領事館の閉館に伴い、デュリーはマダガスカルへの転勤を命じられました。しかし、デュリーは、これを拒否して、京都府が創設したフランス学校の校長兼教師になりました。



Léon DURY  
レオン・デュリー

デュリーが京都で勤務していた頃、京都府知事からの依頼で、1872年に3名の西陣織の職人が、絹織物産地として有名なリヨンへ派遣されました。井上伊兵衛、佐倉常七、吉田忠七のうち、吉田は、フランスから日本へ向かっていた1873年3月20日に伊豆半島の入間沖で座礁して沈没したフランスの貨客船ニール号に乗船していたため、命を落としました。乗客乗員合わせて94名（諸説あり）のうち、命が助かったのは4名のみという悲惨な事故で、吉田は唯一の日本人犠牲者となりました。しかし、他の船で先に帰国していた井上と佐倉は、デュリーの計らいで、ジャカード織機を持ち帰りました。ジャカード織機とは、穴を開けた厚紙（パンチカード）を使った最初の機械式織機で、パンチカードを使うことで複雑な模様を早く織ることができるものでした。ジャカード織機の導入によって、西陣織の生産性は飛躍的に向上し、日本の絹織物の近代化に大きく貢献しました。

デュリーは、1877年の帰国に先立ち、新しい日本を作る優秀な人材を育成するためには、フランスで最新の知識と技術を学ぶ必要があると京都府知事に進言しました。染色、織物、機械、鉱山を始めとしてそれぞれに異なる分野を学ぶために、8名の若者が選抜されました。デュリーは、知事から任されて、学校の選定から留学生活の支援まで、留学生たちの一切の面倒を引き受けました。彼らは、休暇の際には、マルセイユ近くのランベスクにあるデュリーの生家で過ごすこともあったと言います。

デュリーの死後の1899年、彼の教え子たちが、恩師デュリーの功績を称えるために京都の寺に「レオン・デュリーの碑」を建立しました。デュリーの教え子たちは、産業界や法曹界など様々な分野で活躍して、日本の近代化に貢献しました。

掲載日：2023年4月3日

## 32 ジャポニズムの立役者：林忠正

19世紀後半から20世紀初めに、ヨーロッパでジャポニズムが流行しました。日本美術は、クロード・モネやフィンセント・ファン・ゴッホに代表されるように、多くの芸術家のインスピレーションの源となりました。フランスにおけるブームの陰には、ある一人の日本人の活躍がありました。それは、美術商の林忠正（1853-1906）です。



1878年のパリ万国博覧会に「起立工商会社」という貿易商社が出品することになり、忠正は通訳として渡仏しました。日本美術ブームを目の当たりにした忠正は、1884年にパリでギャラリーを開きました。忠正は、流暢なフランス語を駆使し、ジャポニザンと言われた日本美術愛好家たちと幅広く交流し、浮世絵を始めとする日本美術の普及に努めました。

忠正は、絵入り雑誌「パリ・イリュストレ (Paris illustré)」誌の日本特集号（1886年5月）で、日本人として初めてフランス語で日本を紹介する記事を書きました。忠正は、日本の歴史、風土、文化や芸術など幅広い分野について正しい情報を伝えようと努めました。

また、忠正は、パリに長く暮らし、博覧会の運営にも知見があったことから、日本政府の要人から推薦されて、1900年のパリ万国博覧会で日本の代表である事務官長を務めました。当時の帝国博物館が編纂した「日本美術史」の仏訳がフランス国立図書館に残されており、仏訳版には忠正が書いた「読者へのあいさつ」が付されています。これは古代から江戸時代までの日本美術を包括的にフランス語で紹介した初めての本で、豊富な美術品の写真を用いた500頁に及ぶ大作です。

忠正は、フランス人に日本美術を紹介する傍らで、同時代の西洋美術をコレクションしました。忠正には、日本で近代の西洋美術を紹介する美術館を開設するという夢がありました。しかし、忠正は、日本に帰国した翌年の1906年、残念ながらその夢を果たせないまま病のため亡くなりました。

ヨーロッパの人が日本美術に関心を持ったとき、忠正のようにそれを広く伝えようと務めた人がいたことで、一大ブームに成長しました。忠正は、ジャポニズムの影の立役者と言えます。

掲載日：2023年12月1日

### 33 アジア美術コレクター・実業家：エミール・ギメ

パリにあるギメ東洋美術館を創設したエミール・ギメ（1836-1918）は、リヨンの実業家の息子として生まれました。父親のジャン＝バティスト・ギメは、合成ウルトラマリンと呼ばれる青色の顔料を発明して成功した人物です。エミール・ギメは、若い頃から異なる文明や宗教に関心を持っていました。父親から引き継いだ工場を経営しながら、1867年のパリ万国博覧会や1873年にパリで開催された第一回国際東洋学者会議へ出席したことで、日本の情報に直接触れる機会を得ました。そして、1876年にフランス政府の「極東宗教学術調査使節」として、日本、中国、インドをめぐる世界一周の旅に出ました。ギメは、画家のフェリックス・レガメを伴って、1876年に2か月間、日本に滞在しました。1878年のパリ万国博覧会では、ギメが持ち帰った東洋の品々が展示され、調査の成果が紹介されました。



Emile GUIMET  
エミール・ギメ

ギメは、日本滞在中に見聞して体験したことや訪れた土地にまつわる歴史や民間伝承を、レガメの挿絵入りで「日本散策」二巻にまとめました。この本では、19世紀末の明治の日本人の行動や宗教観について、エジプトやインドといった他国との比較も交えながら、ギメ独自の興味深い分析がなされています。

著書の中で、ギメは次のように語っています。

「日本は、自国の風俗に対し、あまり自信を持っていない。日本人の力となり幸せの源となってきた多くの風俗、制度や考え方をあまりにも性急に一掃しようとしている。だが、もしかしたら日本が自分たちを見直すときが、いつの日か訪れるのではないだろうか。私は日本のためにそれを願っている。」

19世紀当時の日本は、日本よりも外国の文化が優れていると考えて日本の伝統文化を捨て去ろうとし、多くの美術品や仏像が海外に流出しました。ギメが日本で蒐集した美術品は、幸いにもギメ東洋美術館のコレクションとして現代に引き継がれています。

掲載日：2023年12月1日

### 34 アジア美術コレクター・銀行家：アンリ・チェルヌスキ

アンリ・チェルヌスキ（1821-1896）はミラノに生まれ（後にフランスに帰化）、1848-1849年の革命（ミラノの蜂起とローマ共和国の樹立）に参加しました。しかし、ローマ共和国が倒れたためにフランスに亡命し、銀行家として財を成した人物です。



Henri CERNUSCHI  
アンリ・チェルヌスキ

1871年にパリ・コミュンが政府軍に鎮圧されました。友人を失ったチェルヌスキは失意の中、若き美術評論家のテオドール・デュレを伴い、1871年9月から1873年1月まで世界一周の旅に出ました。日本と中国で約5000点の美術品を蒐集し、これが美術館のコレクションの基盤となりました。

チェルヌスキは帰国後、コレクションを所蔵するためにパリのモンソー公園近くにイタリア式の邸宅を建てました。チェルヌスキの死後、邸宅とコレクションはパリ市に寄贈され、1898年に美術館（現在のパリ市立チェルヌスキ美術館）が開館しました。

美術館のコレクションの中で、ひときわ目を惹くのが、高さが4メートル以上もある大きな仏像です。明治時代（1868-1912）になり、日本社会は、大きな変革の中にありました。鉄道が開通し、電気が通り、郵便制度が始まりました。欧米の食生活が取り入れられ、洋服を着るようになり、人々の生活は西洋化されていきました。一方で、仏教寺院や仏像を取り壊す廃仏毀釈の動きが強くなり、多くの美術品や仏像が海外に流出しました。1871年に、チェルヌスキとデュレが日本に滞在した3か月の間に買い集めたものの一つが、この仏像です。

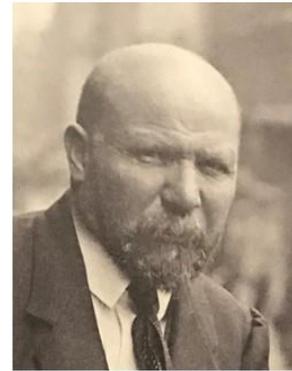


この仏像は、後の調査で、東京都目黒区にある蟠龍寺（ばんりゅうじ）にあった阿弥陀如来であることが分かりました。海を渡った美術品の多くは行方が分からなくなりましたが、蟠龍寺にあった仏像は、チェルヌスキのおかげで廃仏毀釈の難を逃れ、今でも私たちが目にすることができます。

掲載日：2023年12月1日

### 39 将来を見据えた篤志家の銀行家：アルベール・カーン

アルベール・カーン（1860-1940）は、南アフリカの金鉱とダイヤモンド鉱への投機で莫大な財産を築き、1898年に自らの銀行を設立しました。カーンは、銀行家として事業を成功させると同時に、慈善事業にも取り組みました。カーンは、世界平和の実現には、人々がお互いを知ることが大切であると考えました。若者に異文化を知ってもらいたいという願いから、世界一周することを目的とする奨学金制度を設立しました。また、1909年には、「地球史資料館」プロジェクトを立ち上げました。1931年までの間に世界中にカメラマンを派遣して、オートクローム写真（初めてのカラー写真）と映像に記録しました。



Albert KAHN  
アルベール・カーン

パリ近郊のブローニュに暮らしたカーンは、邸宅の周囲の土地を少しずつ買って敷地を広げ、フランス庭園、イギリス庭園や故郷のボージュ地方をイメージした森も造りました。事業を通じて日本に関心を持ったカーンは、日本庭園も造りました。自邸の庭園にも、異文化を知ることが世界平和につながるというカーンの考えが反映されています。

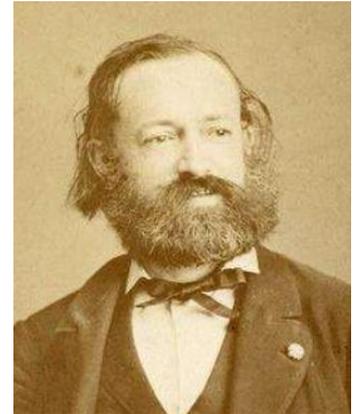
カーンが日本庭園を造ったのは、当時の富裕層では日本人の庭師を抱えて日本庭園を造らせることが一種のステータスであったことと、彼自身が日本の実業家とも親交があったことが背景にあると考えられます。カーン自身も日本を訪れたことがあり、「日本の資本主義の父」と言われた渋沢栄一を始めとする財界の重鎮や総理大臣を二度務めた大隈重信を始めとする大物政治家と交流を持ちました。

カーンの邸宅は、現在のオー＝ド＝セーヌ県立アルベール・カーン庭園として、一般公開されています。日本村と呼ばれるエリアには、日本から移築した古民家や茶室があります。日本にある日本庭園とは少し異なりますが、フランスの樹木や石と日本の木造建築が融合した日本的な庭園です。日本村の隣には、約30年前に日本人造園家の高野文彰氏によって、日本現代庭園が造られました。これは、日本の伝統的な庭園の要素を取り入れた現代的な庭園です。庭園に隣接して、著名な日本人建築家・隅研吾の設計によるアルベール・カーン美術館があります。このように、庭園と美術館は、日本とフランスの文化的な対話を示すもので、緊密で安定した日仏両国のつながりを見ることができます。

掲載日：2023年12月1日

## 18 日本研究の先駆者：レオン・ド・ロニー

レオン・ド・ロニー（1837-1914）は、1852年から東洋言語特別学校（Ecole spéciale des langues orientales）（現在のフランス国立東洋言語文化学院（INALCO）の前身）で中国語を学び、最初は中国語の勉強に没頭しました。教授に日本語の研究を勧められたことがきっかけで、独学で日本語を学び始めました。ロニーは、「日本語研究に必要な主要な知識の概要」（1854年）と「日本語研究入門」（1856年）を出版し、ヨーロッパで初めて包括的に日本語を紹介しました。



Léon de ROSNY

レオン・ド・ロニー

その後、ロニーは、福沢諭吉が参加した文久遣欧使節が1862年にフランスを訪問したときには、通訳を務めるほどの日本語力を身につけていました。1863年には、母校・東洋言語特別学校に日本語講座が開講した際、講師に就任しました。後に教授に昇任し、1907年に退職するまで日本語を教え続けました。日本語に関する資料が少ない時代に日本を一度も訪れることなく、フランスにおける日本学や日本語研究の発展に尽力しました。

1863年に日本語講座が開講したときの講演録が、フランス国立図書館に残されています。ロニーは、日本の魅力と日本語を学ぶ将来性について、学生たちに次のように語りました。

「今日、東洋の国々の中でエネルギーで活力に満ち、未来に向かって自らの意思で勢いよく前進しているのは日本だけです。外国の圧力を受けずに、ヨーロッパ人が実現した大きな進歩を取り入れようとしているのは、日本人だけです。文句を言わず、休むことなく、ヨーロッパに追い付こうと努力しているのは、日本人だけです。」

「このように優れた性質を持つ日本人に対してヨーロッパ諸国が持つ政治や貿易における関心は、日々急速に増すばかりです。ですから、日本語を研究することは、間違いなく好機で将来性があります。」

19世紀と21世紀では、国際情勢は異なります。しかし、ロニーの言葉から、いつの時代でも外国に関心を持ち、異なる言葉や文化を学ぶ必要があることを教えられます。

掲載日：2022年9月5日

## 21 日本近代洋画の父：黒田清輝

黒田清輝（1866-1924）は、鹿児島に生まれました。法律を学ぶためにフランス語を勉強し、17歳でフランスへ渡りました。



KURODA Seiki  
(National Diet Library, Japan)  
黒田清輝（国立国会図書館）

パリで法律を勉強していた黒田は、1886（明治19）年、画家の藤雅三（1853-1916）と山本芳翠（1850-1906）、パリで日本美術を広めた美術商の林忠正（1851-1906）から画家になることを勧められました。黒田の父親は黒田が画家へ転向することには反対していたため、しばらくは法律の勉強を続けながら絵画を学びました。しかし、1887年には法律大学校を退学し、ラファエル・コラン（Louis-Joseph-Raphael COLLIN）（1850-1916）に師事して、絵画の勉強に専念しました。

黒田は1890年から1892年までの約2年半、日本人として初めて、パリから南東に約80キロの距離にあるグレー＝シュル＝ロワンに滞在しました。そこは、セヌ川の支流であるロワン川が流れ、静かで穏やかな光があり、北欧や米国の芸術家が滞在した芸術家村でした。黒田はここで明るい外光表現を取り入れた作品を制作しました。

1893年に帰国した黒田は、1896年に東京美術学校（現在の東京芸術大学）に設置された西洋画科の教員となり、後進の指導にあたりました。フランスには黒田の作品がないことから黒田の名は知られていませんが、日本には黒田が描いた有名な作品が残されています。日本の洋画（西洋からもたらされた油彩画）の発展に貢献したことから、黒田は「日本近代洋画の父」と言われています。

2001年、グレー＝シュル＝ロワンに、フランスで初めて日本人の名を冠した通りである「黒田清輝通り」が誕生しました。黒田の出身地である鹿児島から毎年フランスへ派遣される美術留学生がここを訪れて作品を制作し、鹿児島とグレー＝シュル＝ロワンとの交流が続いています。

掲載日：2022年12月2日

## 22 洋画家：浅井忠

「日本近代洋画の父」と言われた[黒田清輝](#)（1866-1924）がグレー＝シュル＝ロワン（パリから南東に約 80 キロ）に滞在した後、そこには多くの日本人芸術家が訪れました。その一人に、浅井忠がいます。

浅井忠（1856-1907）は、幼い頃から絵に興味を持ち、1876（明治 9）年に、日本で最初の美術学校として設立された工部美術学校に入学し、イタリア人画家アントニオ・フォンタネージ（Antonio FONTANESI）から本格的に西洋美術を学びました。



ASAI Chu/浅井忠

1889 年に、浅井が中心になって、明治美術会が設立されました。これは、日本で最初の洋画団体でした。浅井は 1898 年に東京美術学校の教授となりましたが、1900 年に 44 歳にして洋画を学ぶためにフランスへ留学しました。浅井は、俳人の正岡子規と親交があり、浅井は病床にある子規に、グレー＝シュル＝ロワンの景色を描いた絵葉書を何枚も送りました。子規が、死を前にして断続的に書いた病床日記「仰臥漫録」（ぎょうがまんろく）には、浅井が送った絵葉書が添付されていました。これらの絵葉書を通じて、日本人はグレー＝シュル＝ロワンの風景を知ることができました。そこには、現在でも浅井がいた頃と変わらない景色が残されています。

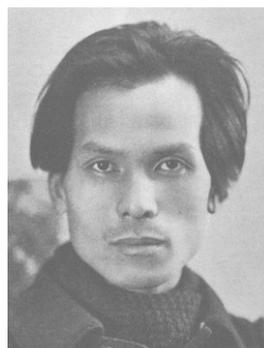
浅井は 1902 年に帰国後、京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）で教鞭をとりながら、絵画を教える私塾を開いて後進の育成に努めました。浅井の弟子の中から、日本で有名な洋画家が何人も誕生しました。

浅井は、ロンドンに滞在していた作家の夏目漱石（1867 年- 1916 年）と親交がありました。浅井は、漱石の小説「三四郎」に出てくる深見画伯のモデルとなりました。

掲載日：2022 年 1 月 10 日

### 38 グラン=モランを描いた画家：佐伯祐三

パリから東へ 50 キロほど行くと、多くの画家が愛したグラン・モラン川流域ののどかな景色が広がります。この川流域の風景に魅了された芸術家の一人に、日本人画家の佐伯祐三（1898-1928）がいます。



SAEKI Yuzo  
佐伯祐三

佐伯祐三は、東京美術学校（現在の東京藝術大学）を卒業後、1924（大正 13）年にパリへ来ました。フォービズムの画家であったモーリス・ド・ヴラマンク（1876-1958）と出会い、ヴラマンクの影響を強く受けました。ある時、佐伯はヴラマンクを訪ね、自分の作品を見せたところ、ヴラマンクにアカデミックな作品であると一蹴され、強いショックを受けたとされるエピソードが残されています。事実、佐伯の作風は大きく変化しました。佐伯が描いた風景画は、モーリス・ユトリロ（1883-1955）の影響も受けていると言われています。佐伯は、パリに長く滞在することを望んだものの体調が優れず、1926（大正 15）年に日本へ帰国しました。フランス滞在を強く望んだ佐伯は、1927（昭和 2）年夏に再び渡仏しました。しかし、1928（昭和 3）年春頃から再び肉体的にも精神的にも衰弱し、その年の 8 月に 30 歳の若さで、フランスで生涯を終えました。

佐伯は、画家として活動したわずか 6 年のうちの半分をフランスで過ごしましたので、佐伯の代表作の多くはフランスで描かれたものです。グラン=モランには、佐伯が描いた風景が現在でも残っています。彼の作品「モランの寺」（写真左下）はサン=ジェルマン=シュル=モランにあるサン=ジェルマン教会をモデルにしています。また、「ヴィリエの市役所」という作品も残されており、これは、ヴィリエ=シュル=モランの市役所を描いたものです。市役所の建物は新しくなっていますが、現在も当時と同じ場所にあります。1928 年 2 月にヴィリエ=シュル=モランに滞在した後に佐伯は体調が悪化したので、これらは彼がパリ以外の場所で描いた最後の作品かもしれません。

一世紀の時が流れても、グラン=モランには、佐伯が描いた景色が今も残されています。川の流れのように、グラン=モランでは時もゆっくりと流れているようです。



掲載日 2023 年 12 月 1 日

## 23 日本画家：高島北海

高島北海（本名は得三）（1850-1931）は、山口県の萩に生まれました。父親は医師で、植物学や鉱物学を基礎とした医療を行っていたことから、高島は幼いときから地質学と植物学に興味を持ちました。



高島北海/TAKASHIMA Hokkai  
© Aklakoi

高島は明治政府の工部省に入省し、明治5（1872）年から4年間、兵庫県にある生野銀山の鉱山学校に赴任しました。そこで、お雇い外国人として同校の技師長を務めていたジャン＝フランソワ・コワニエ（Jean-François COIGNET）（1837-1902）から、フランス語と地質学や植物学を学びました。明治17（1884）年に政府から派遣されて、万国森林博覧会に参加するためにイギリスへ渡りました。ヨーロッパ各地の森林を視察した後、ナンシー水利林業学校（現在のフランス国立農村工学・河川・森林学校 École Nationale des Eaux et Forêts : ENEF）に3年間在学して、植物学を学びました。

ナンシーは、フランスにおけるアールヌーボー様式の中心地でした。そして、高島がナンシーに滞在した19世紀末は、花や植物のモチーフを多用したアールヌーボー様式が最も花開いた時代でした。ここで、高島はナンシー派を代表するエミール・ガレと出会いました。ある研究によると、当時は至る所で日本の影響が色濃く見られており、ジャポニスムにうんざりしていたガレは、決して日本の影響は受けないと心に誓ったと言います。しかし、高島の自由な想像力と正確な植物描写は、ガレを始めとするナンシー派の芸術家に大きな影響を与えました。ガレは、高島から日本の植物を始めとした日本に関する知識を得たと言われていいます。高島との交流がきっかけとなって、ガレは水墨画のようなぼかし表現を伴う黒褐色のガラスを生み出しました。

高島は、帰国後は明治政府の技官として森林行政に携わりながら、植物学に対する深い造詣を活かし、高い写生技術を用いた山岳風景画を描きました。そして、47歳で退官し、52歳から雅号を「北海」として本格的に中央画壇で活躍しました。

ナンシーがアールヌーボー様式の中心地であり、そのナンシーでアールヌーボーが流行した時代に高島とガレが出会い、高島が植物学者でもあり芸術家でもあったからこそガレの作風に影響を与えました。このようないくつもの偶然の重なりが、新たな美術様式の発展を後押ししました。

掲載日：2023年2月1日

### 36 ナンシー派とジャポニスム：エミール・ガレ

アール・ヌーヴォーの代表的な人物と言えば、エミール・ガレ（1846-1904年）が挙げられます。アール・ヌーヴォーとは、19世紀末から20世紀初めにかけて、ヨーロッパやアメリカで流行したスタイルです。花や植物といった自然をモチーフにし、曲線を使ったデザインが特徴で、建築、家具調度品や宝飾などの工芸品、絵画やグラフィック・アートなど多くの分野で新たな潮流を生み出しました。



Emile GALLÉ  
エミール・ガレ

ガレは、ドイツに近いフランス北東部のナンシーで、ガラス工芸やファイアンス焼きの工場経営者の家に生まれました。1870年に勃発した普仏戦争でフランスが敗北し、アルザス地方がドイツに併合されました。しかし、ナンシーがあるムルト=エ=モゼル県はフランスに留まったため、ドイツ国民となることを拒んだ人々がナンシーに移住してきました。その中には、アール・ヌーヴォーの芸術家や職人も数多く、ナンシーはアール・ヌーヴォーの中心地となり、ガレによって「ナンシー派(école de Nancy)」が結成されました。今でもナンシーの街中にはアール・ヌーヴォー様式の建物が多く残されています。

ガレは、1878年や1899年のパリ万博にガラス作品、陶器、家具を出品し、次々と入賞して装飾工家としての地位を確立しました。日本では、ガレと言えばガラス工芸品が有名ですが、ガレは家具職人でした。また、ガレの工房では陶器も制作しました。

ガレの作品の中には、日本的なデザインが取り入れられているものもあります。アール・ヌーヴォーが起こる少し前にはジャポニスムのブームも起こり、フランスに日本文化が入り始めていました。しかし、それだけではなく、ナンシーに留学していた日本画家で植物学者でもあった高島北海との出会いによって、ガレは独自のスタイルを生み出しました。それは、ただ単に日本の意匠を取り入れた異国趣味のある作品ではなく、日本の意匠からヒントを得て考えられたデザインを取り入れたものです。日本を代表する浮世絵師の葛飾北斎(1760-1849)による絵の手本帳である「北斎漫画」の鯉をモチーフとしたガラスの花瓶は、その一例と言えます。

日本的でもなく、ヨーロッパの古典的なものとも違うガレ独自のデザインは、今も日本とフランスで愛されています。

掲載日：2023年12月1日

## 14 和歌に魅せられた作家ジュディット・ゴーティエ

作家のジュディット・ゴーティエ（1845-1917）は、同じく作家のテオフィル・ゴーティエの娘としてパリに生まれました。1862年に父親と訪れたロンドン万国博覧会で初めて日本人に接し、日本に関心を持ちました。翌年、父親が雇った中国人家庭教師から中国語を習い、中国詩集の翻訳や小説を出版しました。ゴーティエはフランスに滞在する日本人とも交流を持つようになり、日本を題材にした小説も発表しました。



Judith GAUTIER  
(National Diet Library, Japan)  
ジュディット・ゴーティエ  
(国立国会図書館)

ゴーティエは、1885年に「蜻蛉集」（せいれいしゅう）という仏訳した和歌集を出版しました。和歌（又は短歌）とは、31（5、7、5、7、7）の音節を持つ五行詩です。和歌は、日本の伝統的な定型詩の中でも、最も古くから存在する形式の詩歌です。8世紀に編纂された日本で最も古い和歌集である「万葉集」には、天皇、貴族、防人、農民など様々な身分の人が詠んだ歌が約4500首も収められています。その後も数多くの和歌集が編纂され、現代に伝えられています。長い間、日本人は、愛する人への思い、死者に対する悼み、自然の美しさや四季の移り変わりなど、様々な感情や経験を歌で表現しました。

蜻蛉集の最初のページには、「日本国天皇参与の西園寺公望の逐語訳によりジュディット・ゴーティエが日本語から翻訳し、山本芳翠の挿絵による」と記載されています。

西園寺公望とは、当時パリに留学中で、後に内閣総理大臣となった人物です。ゴーティエからの依頼を受けて、古今和歌集の中から88首を選んで逐語訳をしました。それをゴーティエが五行詩に翻訳し、パリで絵画を学んでいた山本芳翠が描いた美しい挿絵を添えた詩集にしました。日仏の合作によって、フランス人に分かりやすく日本の古典文学を紹介する素晴らしい作品が生まれました。

14 和歌に魅せられた作家ジュディット・ゴージェ

Pour cueillir la branche  
Dont l'eau berce la couleur  
Sur l'eau je me penche:  
Hélas! J'ai trempé ma manche  
Et je n'ai pas pris de fleur!  
La princesse Issé

春ごとに  
ながるる河を  
花と見て  
をられぬ水に  
袖やぬれらむ  
伊勢



掲載日：2022年4月1日

## 20 風刺画家：ジョルジュ・ビゴー

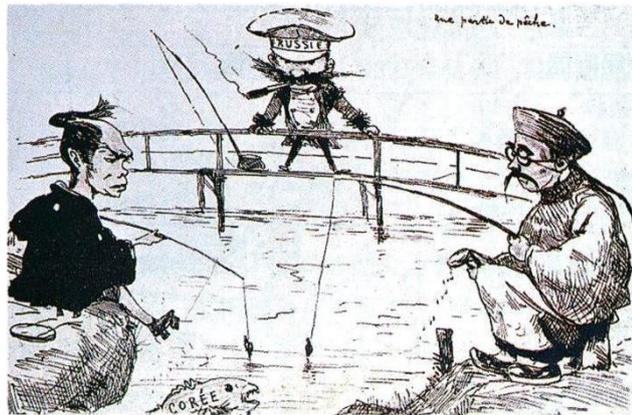
ジョルジュ・ビゴー（1860-1927）は、1872年に国立美術学校（Ecole des Beaux-Arts）に入学しましたが、家計を助けるために1876年に退学して、挿絵の仕事を始めました。仕事を通して出会った日本愛好家（ジャポニザン）の影響で日本へ憧れを持つようになり、1882年から2年間、士官学校で絵画を教えるお雇い外国人として日本に滞在しました。当時は写真の信頼性が低かったことから、士官学校では写生技術を教える授業がありました。



Georges Ferdinand BIGOT  
ジョルジュ・ビゴー

ビゴーは、1887年に横浜の外国人居留地に住むフランス人向けに漫画雑誌「TÔBAÉ」を創刊しました。この雑誌の名前は、浮世絵の一つの様式で「江戸の漫画」とも言われる鳥羽絵に由来します。ビゴーは、版画やスケッチによって、当時の日本の世相を表した風刺画を描きました。

雑誌「TÔBAÉ」の創刊号に「漁夫の利（原題は魚釣り遊び）」（une partie de pêcheur）と題する風刺画が掲載されました。これは、対立していた日本と中国（清）が朝鮮という魚を狙い、釣り上げられた魚を横取りしようとするロシアを描いています。この絵は、日清戦争（1894-1895）前の当時の情勢を描いた風刺画として、日本の教科書に載っています。ビゴーの名前は知らなくても、日本人にはよく知られた絵です。



風刺画ですので実際よりも誇張して描かれてはいますが、現代では、ビゴーが残した多くの絵は、当時のヨーロッパ人の日本人に対する見方や当時の人々の生活の様子を知る貴重な史料となっています。

掲載日：2022年11月3日

## 27 明治の日本を描いた画家：フェリックス・レガメ

芸術一家に生まれたフェリックス・レガメ（1844–1907）は、絵の才能を見出されて、若い頃から多くの新聞や雑誌にデッサンを描きました。レガメは、デッサンと絵画の勉強を熱心に続け、美術学校でデッサンを教えました。1870年に普仏戦争が始まると、レガメは、勉強と教職は中断したものの、戦場ジャーナリストとしての活動は続けました。レガメは、戦いの前線から気球郵便を使い、パリとロンドンの絵入り新聞各紙に戦況を描いたスケッチを送りました。1873年にアメリカへ渡り、挿絵を描いて生計を立てながら、パリ包囲戦の主要事件を自身のスケッチとともに語る講演会を行いました。そして、1876年のフィラデルフィア万国博覧会で、リヨンの実業家エミール・ギメ（1836–1918）と出会いました。日本に憧れを抱いていたレガメは、フランス政府の「極東宗教学術調査使節」に参加したギメとともに、記録画家として日本へ旅立ちました。



Félix REGAMEY  
フェリックス・レガメ

2か月間の日本滞在の間、ギメが多数の資料、彫像や工芸品を蒐集する傍らで、レガメは、寺社の光景、自然の風景や庶民の暮らしを描き続けました。

帰国後の1878年に、ギメが文章を書き、レガメが挿絵を描いた「日本散策」の第一巻が出版されました。この本は、パリ万博開催中に出版されたことから、ジャポニズム熱に沸く人々に人気を博したと言います。また、1880年には第二巻が刊行されました。



1884年にレガメは、公教育美術大臣から、パリ市の学校におけるデッサン教育の視学官に任命されました。また、1898年には同大臣から、日本における美術教育の調査を委託されて、再び日本を訪れました。この時の日本旅行は、245点の挿絵を収めた「日本の印象」と380点の白黒又は多色刷りの図版が挿入された旅行記「日本」の二冊にまとめられました。

レガメは1900年に設立されたパリ日仏協会の発起人の一人となり、その後事務局長に就任しました。設立総会には、お雇い外国人として日本に滞在した経験を持つ法学者のギュスターブ・ボアソナードや軍人のジュール・ブリュネも出席しました。また、美術館を設立したギメも、この協会の活動を支援しました。そして、レガメは1907年にこの世を去るまで、この協会の世話役として奔走し、日仏文化交流の発展に貢献しました。

掲載日：2023年6月5日

## 28 日本育ちのフランス人版画家：ポール・ジャクレー

ポール・ジャクレー（1896-1960）は、父ポール=フレデリックがお雇い外国人のフランス語教師として日本へ赴任したことに伴い、1899年から東京で生活を始めました。進学した東京の小学校と中学校では、ジャクレーは学校で唯一の西洋人でした。幼い頃から病弱であったジャクレーは、一年の半分を東京の中学校で過ごし、残り半分は太平洋に面した伊豆で家庭教師について学びました。教育熱心な両親のおかげで、ジャクレーは、フランス語、日本語、英語のほか、絵画や書道、バイオリンや三味線、乗馬や水泳といったスポーツを身に付けていきました。中でも浮世絵に関心を示し、当時の有名な日本人の洋画家や浮世絵師の教えを受けました。



Paul JACOULET  
ポール・ジャクレー

ジャクレーが中学校を卒業した翌年の1914年に、第一次世界大戦が勃発すると、父ポール=フレデリックは、兵士となるためにフランスへ帰国しました。ポール=フレデリックは前線で活躍したものの、戦争によって傷ついた身体で帰国しました。経済的に苦しくなり、ジャクレーはフランス大使館で翻訳の仕事を始めました。その後、父の他界、母のフランスへの帰国、1923年に発生した関東大震災という不幸が続きました。

1929年、息子の体調を心配する母の勧めで、ジャクレーは気候が温暖なミクロネシア地域の島々を訪れました。そこで意欲的に創作活動を行い、数多くのデッサンや水彩画を制作しました。1933年に、ジャクレーは木版画で身を立てる決意をしました。日本の伝統的な浮世絵の作り方である画家、彫師と摺師の分業制を復活させる一方で、紙や絵の具は新しい素材を取り入れました。「若礼版画研究所」を立ち上げました。ジャクレーは、日本の浮世絵と仏領ポリネシアのタヒチで生活したポール・ゴーギャンの色使いからインスピレーションを得た独自のスタイルを確立しました。

1941年に太平洋戦争が勃発すると、画家としての活動を中断せざるを得なくなりました。1945年初めには、フランス国籍を持つジャクレーは、長野県の軽井沢に強制疎開させられ、憲兵の監視下での生活を余儀なくされました。戦後は、美しい山に囲まれた軽井沢に住居とアトリエを構えて、1960年に病で生涯を閉じるまで、そこで版画の制作を続けました。生涯のほとんどを日本で過ごしたジャクレーは、東京都内の墓地で、父ポール=フレデリックとともに静かに眠っています。

掲載日：2023年7月3日

## 29 広重四世：ノエル・ヌエット

ノエル・ヌエット（本名フレデリック＝アニエス・ヌエット）（1885-1969）は、母親から見せられた歌川広重の浮世絵の影響で、幼い頃から日本に関心を持っていました。しかし、すぐに日本行きを考えたわけではなく、学生時代は詩人を目指して勉強し、何冊かの詩集を発表しました。



Noël NOUËT  
ノエル・ヌエット

転機が訪れたのは1925年でした。日本大使館から、旧制静岡高校のフランス語教師の職の打診を受け、日本行きを決意しました。静岡の高校でフランス語とフランス文学を教えながら、週に一度、東京にある陸軍士官学校での講義も行いました。三年間の雇用契約が終了した後、パリへ戻ると詩人や作家としての活動を再開しました。1930年に日本大使館からの依頼で、東京外国語学校（現在の東京外国語大学の前身）のフランス語教師として再び日本に滞在しました。

ヌエットは、講義の合間に東京都内の各地をめぐり歩き、目にする光景を万年筆でスケッチしました。幼い頃に見た広重の浮世絵に着想を受けていたヌエットは、広重が繰り返し描いた江戸の姿を留める場所を探し求めました。ヌエットが描いたスケッチは、雑誌に掲載され、1934年にはスケッチ集が日本で出版されました。ヌエットは、スケッチ集の中で東京の歴史を紹介し、それぞれのスケッチに解説を付けました。このスケッチ集は大成功を収め、翌年には続編も出版されました。ヌエットのスケッチに感銘を受けた日本の版画商が、それらのスケッチを浮世絵版画シリーズにすることをヌエットに提案し、1937年に木版を用いた伝統的な手法による手刷りの色版画24枚シリーズが出版されました。ヌエットの友人たちは、「広重四世」というあだ名をつけました。

1939年に第二次世界大戦が勃発すると、フランス人のヌエットは大きな困難が直面しました。フランス語の書物の輸入が禁止されたため、自分でフランス語の教科書を作成しました。また、1945年初めには、他の在日外国人と同様に、長野県軽井沢に強制疎開させられ、憲兵の監視下で暮らしました。終戦後、ヌエットは東京へ戻り、焦土と化した東京を歩き回り、廃墟となった街を描きました。

その後も、ヌエットはフランス語を教えながら、スケッチや著作を発表していきました。1962年、ヌエットは約35年生活した日本での生活を終え、フランスへ本帰国しました。

1965年、東京都は、ヌエットに対して外国人として二人目となる東京都名誉都民の称号を贈りました。

掲載日：2023年9月1日

### 30 ジャポニスム時代の日本人庭師：畑和助

1867年に開催されたパリ万博に日本が初めて参加して以降、フランスではジャポニスムと言われ、日本美術が注目されました。1889年のパリ万博の際は、現在のトロカデロ公園一帯が園芸展示場となり、ここに日本庭園が造られ、日本の植物も展示販売されました。植物の管理や造園のために日本からやってきたのが、庭師の畑和助（1865-1928）でした。園芸展示も大変好評で、日本の万博参加の成功に大きく貢献したと言います。



HATA Wasuke/畑和助

畑は、フランスにおける日本庭園の歴史の中で、重要な足跡を残しました。畑は、万博終了後もフランスに留まり、フランスの富豪たちの邸宅で、日本庭園の造園や維持管理を行いました。万博で畑が造った庭園を見て、畑の才能を見出したのが、詩人で評論家でもあったロベール・ド・モンテスキュー（1855-1921）でした。モンテスキューは、畑を庭師として雇い、ヴェルサイユにあった邸宅の庭に日本庭園を造らせました。

畑は、写真家で旅行家であったユーク・クラフト（1853-1935）から注文を受けて、ヴェルサイユから近いレ＝ロジュ＝アン＝ジョザに日本庭園を造りました。ランス出身のジャポニザンであったクラフトは、1881年から1883年にかけて世界一周をした際に、日本に5か月間滞在しました。この時、クラフトは日本の伝統文化に魅了され、日本家屋を購入してフランスに送り、日本から大工を呼んで家屋を建てさせました。そして、畑は建物の周囲に、和風の池泉、流水、滝を造り、橋や石灯籠も配した本格的な日本庭園を造りました。クラフトはこの日本庭園を「緑の里」と名付けました。この庭園は現存しませんが、クラフトの邸宅があった通りは、「ミドリ通り」（rue de Midori）と呼ばれています。

後に、畑はモンテスキューの紹介で、エドモン・ド・ロチルド男爵に雇われ、ロチルド邸の庭園の中に日本庭園を造りました。現在は、ブーローニュ・エドモン・ド・ロチルド公園として、市民の憩いの場になっています。公園内には、当時日本庭園があった石灯籠の台座部分ではないかと推測される石が残されています。

ジャポニスム時代、フランスにおける日本庭園の造園は、畑のような日本人庭師の活躍に強く影響されました。畑は、フランス人女性と結婚し、生涯一度も日本に帰ることなく、フランスで生涯を閉じました。静寂と気品の象徴である日本庭園は、19世紀のフランスの上流階級で高く評価されました。このように、日本人庭師の活躍があったからこそ、フランスにおいて日本庭園が発展しました。

掲載日：2023年10月2日

## 31 日本の近代植物学の父 - リュドヴィク・サバティエ

1866年、海軍医であったサバティエは、横須賀製鉄所（後の横須賀造船所）の建設を監督したレオンス・ヴェルニーが引き連れて来た50名を超える部下の一人として、横須賀へ到着しました。製鉄所の衛生部長として病院の体制作りを進めながら、製鉄所で働くフランス人や日本人疾病者に必要な治療を施しました。



Ludovic SAVATIER  
リュドヴィク・サバティエ

サバティエは、植物学に高い関心を持っていたことから、医師として働く傍らで、植物採集も行いました。収集した植物の標本は、パリにある国立自然史博物館へ送られました。サバティエに協力したのが、同博物館の学芸員で研究者であったアドリアン・フランシェ（1834-1900）でした。医師としての仕事が忙しかったサバティエは、地方まで足を運ぶことが難しかったため、他の協力者の力も借りながら日本の植物の採集を続けました。最終的に、サバティエがフランスにもたらした日本の植物の標本は、15,000点で1,800種を数えました。これは、当時知られていた日本の植物の約半数にのぼると言います。中には、新種の発見もありました。採集と同時に、ヨーロッパに順化できそうな植物の探求にも努めました。日本の植物学者との間で植物の交換を行いました。サバティエが日本へ送った植物の中には、貴重な日本原産のヤマユリ（学名：Lilium auratum、仏語名：lys doré du Japon（直訳すると、日本の黄金色のユリ））も含まれていました。

サバティエは、日本滞在中に、ヨーロッパの植物を日本へ順化させることにも成功しました。横須賀の自宅の庭にヨーロッパから送られてきた苗木や野菜を植えて、日本の土地に合う植物を探しました。サクラ、アンズ、スモモ、ナシ、大粒のイチゴ、レタス、インゲンマメ、タマネギなど、様々な種類の木や野菜が植えられました。1873年に、彼が数年前に東京にある小石川植物園に送ったサクラとモモの木に果実が実りました。これは、日本で初めて獲れたサクランボでした。

サバティエは、研究成果を本にまとめました。一冊目は、「花彙」という日本の植物図集の仏語訳で、二冊目は、アドリアン・フランシェとの共著「日本植物目録」です。後者は、本格的な日本の植物図鑑でした。これらは、ヨーロッパに広く日本の植物や植物学について伝える書物となりました。

このように、サバティエは、日本の近代植物学の父と考えられる大きな功績を残しました。サバティエの足跡は、私たちにとって身近な花や果物を含む植物が、100年以上前の植物学者たちの熱意と努力によって、それぞれの土地に根付いたものであることを教えてくれます。

掲載日：2023年11月2日

### 35 オーギュスト・ロダンと日本

19 世紀を代表する彫刻家のオーギュスト・ロダン (1840-1917) は、日本で最も名が知られた彫刻家と言っても過言ではありません。日本人の中には、ロダンから直接に教えを受けた彫刻家もいれば、ロダンの作品から影響を受けた芸術家も数多くいます。同時に、ロダンも日本美術を愛した一人で、日本美術を蒐集しました。また、日本人女性のマスクも作りました。



Auguste RODIN  
オーギュスト・ロダン

その女性は、ロダンのモデルとなった唯一の日本人である花子です。花子 (本名：太田ひさ) (1868-1945) は、貧しい幼少時代を過ごし、旅芸人の一座に入って子役として身を立てました。20 歳で最初の結婚をしましたが家庭生活には恵まれず、34 歳でデンマークに渡りました。ヨーロッパで「花子」として女優デビューを果たし、花子が出演した公演はイギリス、ドイツ、ロシア、トルコなど各地で成功を収めました。ロダンはマルセイユで行われた公演を訪れ、花子が演じた切腹のシーンに目を奪われ、ロダンは花子に自分のモデルになってほしいと頼みました。こうして、花子はロダンのモデルを務めるようになり、ロダンは約 60 点の花子の作品を作りました。

一方、日本では、1910 年に創刊された文芸雑誌「白樺」で、ロダン特集号を組むことになりました。白樺には、武者小路実篤や志賀直哉を始めとする作家、画家の有島生馬、民藝運動の主唱者である柳宗悦など、当時の日本の知識階級が参加していました。特集号の発行前に、白樺の同人からロダン宛てに手紙を出しました。ロダンからの返信には、浮世絵を送ってくれたらロダン自身の作品を送ると書いてありました。そこで、日本から浮世絵を送ると、ロダンから「ロダン夫人」、「巴里ゴロツキの首」、「或る小さき影」の 3 点 (現在は大原美術館所蔵) が送られてきました。実際にロダンの作品を観た白樺の同人たちは、大変興奮したと伝えられています。これらは、初めて日本にもたらされたロダンの作品です。

ロダンが活躍した時代に、ロダンは日本人芸術家の憧れの存在でした。同時に、日本美術や日本人モデルが、ロダンの創作活動をより豊かなものとしていました。ロダンは、一度も日本を訪れたことはありませんでしたが、19 世紀の日本の芸術を語る上で欠かせない芸術家となりました。

掲載日:2023 年 12 月 1 日

### 37 エコール・ド・パリの寵児：藤田嗣治（レオナール・フジタ）

エコール・ド・パリを代表する画家のレオナール・フジタ（藤田嗣治）（1886-1968）は、フランスで活躍した日本人の中で最も有名な人物の一人です。

藤田が初めてフランスの地を踏んだのは、1913年でした。藤田のフランス生活は、パリのモンパルナスから始まりました。そこで、当時モンパルナスで生活していた巨匠のパブロ・ピカソや親友のモディリアーニと出会うという幸運にも恵まれました。しかし、第一次世界大戦が始まり、フジタの画家としてのキャリアは困難なスタートとなりました。最も苦しいときは、暖をとるために自ら描いた絵を焼いてしまったこともありました。絵を描くことを止めることはありませんでした。フジタは自分なりの独特のスタイルを求めて1919年に初めて裸婦を描き、これが「乳白色の肌」と呼ばれたフジタの作品の始まりとなりました。次第に画家としての地位を認められ、1929年に完成した[パリ国際大学都市の日本館](#)に、「欧人日本への渡来の図」と「馬の図」を収めました。



Léonard Tsuguharu  
FOUJITA  
藤田嗣治

第二次世界大戦が勃発し、1940年に藤田はフランスを離れざるを得なくなり、日本に帰国しました。しかし、戦争で揺らぐ日本社会に馴染めず、フジタは1950年にフランスに戻りました。フランスに骨を埋める覚悟を決めたフジタは、1955年にフランス国籍を取得して日本国籍を抹消しました。1959年にはランス大聖堂で受洗し、レオナルド・ダ・ビンチにちなんで、レオナールという洗礼名を授けられました。

そして、フジタは、1960年10月、73歳の時にパリ中心部から南西約30キロに位置するヴィリエール＝バークルに一軒家を購入し、翌年に転居しました。フジタは、ここで妻の君代とともに生活しました。この近くにあった友人の家を訪ねた際にこの地域を気に入ったことから、知人に依頼してこの地域で家を探しました。静かな環境にある住居兼アトリエで、フジタは制作に没頭しました。このフジタの家は、当時のフジタ夫妻の生活の様子を残した姿で一般公開されています。一階と二階が住居で、屋根裏のアトリエにはフジタが使った筆とパレット、日本語が書かれたシールが貼られた顔料の入った瓶やミシンなどが残されています。フジタが、1966年にランスに建てたフジタ礼拝堂（平和の聖母礼拝堂）に描かれたフレスコ画の習作を見ることもできます。

フジタは、日本とフランスのいずれにおいても戦争を体験し、生涯で5人の女性を愛し、晩年にはフランスに帰化し、病のために1968年にスイスで死去しました。激動の人生を歩んだフジタは、妻の君代とともに、自らが設計したフジタ礼拝堂で安らかに眠っています。

掲載日：2023年12月1日

## 40 日本を愛したピアニスト：アルフレッド・コルトー

20世紀前半のフランスを代表するピアニストであるアルフレッド・コルトー（1877-1962）は、フランス人の父とスイス人の母の間にスイスで生まれました。コルトーは演奏者として活躍すると同時に教育者でもありました。自らの理想とする音楽教育を実現するために、1919年に、パリにエコールノルマル音楽院を設立しました。



Alfred CORTOT  
アルフレッド・コルトー

コルトーは、1952年に来日し、全国各地で公演を行いました。山口県でコンサートを行った際に、現在の下関市にある川棚温泉のホテルに宿泊しました。ホテルから眺めた美しい厚島（男島、女島、竜宮島、石島の四島からなる島々の総称で無人島）とそれを囲む海の美しい風景に魅了されたコルトーは、「私はこれまで世界の美しい海や山を見てきたが、こんなに美しい夢のような島はみたことがない。なぜか外国にいる気がしない。日本はまるで故郷のようだ。」と同行していた弟子に話したと伝えられています。コルトーは当時の川棚村の村長に「天国のようなあの島でこっそり死にたい。ぜひ買いとりたい。」とも話したと言われています。村長は大変驚いたものの、コルトーの言葉と熱意に心を打たれて、「あの島に永久にお住みになるなら、無償で差し上げましょう」と快諾し、島の名前を「孤留島（コルトー）」と命名することも提案しました。「私の思いはひとりあの島に残るだろう」との言葉を残して、コルトーは帰国しました。帰国後のコルトーは、自分の名前の島が日本にあることを周囲に嬉しそうに話し、日本への再訪を夢見ていたと伝えられています。しかし、コルトーは病に倒れ、願いを果たせないまま1962年にこの世を去りました。

コルトーの抱いた夢は叶いませんでしたが、コルトーの思いが完全に消えたわけではありませんでした。厚島（孤留島）が縁となって、2007年に下関市とエコールノルマル音楽院がパートナーシップを締結しました。2010年には、コルトーが滞在したホテルの跡地には、隈研吾設計の「下関市川棚温泉交流センター 川棚の杜」が完成しました。この施設には、コルトーホールと名付けられた音楽ホールが設けられ、毎年「コルトー音楽祭」が開催されています。

コルトーによって日本とフランスとの間の交流が生まれ、コルトーが残した言葉のとおり、コルトーの思いは今も日本で生き続けています。

掲載日：2023年12月1日



2023 年 12 月

在フランス日本国大使館 広報文化部文化班